

# 昭和の博多 追憶の一冊

## 平和台でラムネ売り 稲尾にも

演劇プロデューサー岡田潔さん



な博多を好きになる。だいぶ変わったと思うけれど、人を引きつける街の遺伝子は受け継がれていますね」岡田さんがあの頃の博多の匂いを伝えている、と考える一つが屋台。「まるでテント芝居。どこからか現れ、熱い語りいとドラマがあり、夢か現か、一夜でまたどこかへ消えていく」

出版前の原稿が福岡県出身の脚本家で演出家の東憲司さんの目に留まり、2009年に舞台化。ライオンズ発足60周年の昨年、福岡で再演した。

今、同時代の東京を舞台にした映画「ALWAYS 三丁目の夕日'64」がヒット中だ。「僕は映画少年でしたから、今度は映画にしたいと考えているんです」1680円。問い合わせは、海鳥社（092・771・0132）へ。

（西正之）

福岡市出身の演劇プロデューサー岡田潔さん(65)が、昭和30年代の博多の街と人間模様を描いたエッセー集「我が心の博多、そして西鉄ライオンズ」を出版した。新聞少年に人生を教えてくれたのは映画館の銀幕、遊郭のお姉さん、そして西鉄ライオンズ……。記憶の中でまぶしく輝く博多版「三丁目の夕日」だ。

岡田さんは博多区末広町 代そのもの。石炭殻の捨て場「ガラの広っぱ」で稲尾

和久、大下弘を夢見てボールを追いかけて、映画館で銀幕のスターに憧れ、遊郭街では甘酸っぱい思いも。

家計を支えるため、新聞配達をはじめ色んなアルバイトをした。平和台球場でラムネ売りをしていたある日、試合が終わり、片づけをしていたところ、「ラム

ネ2本」。振り返ると、そこにいたのは、さっきまで熱狂の渦にいた神様稲尾。すかさずサインをもらったハンカチは、遊郭のお姉さんの手に渡り……。

そんな博多とライオンズを巡る思い出をかつて二つの雑誌に連載。大幅に書き直して一冊にまとめた。

「あの頃の博多は人の匂いがぶんぶんしていた。もう戻れないけれど、大切なものとは何かを考えてもらうきっかけになれば、と書いたんです」

岡田さんは昭和40（1965）年、東京の大学へ進むため、博多の街を後にした。海外放浪などを経て、演劇プロデューサーとしてこの17年間で65本の舞台を世に送った。博多では毎年公演がある。

「役者、スタッフがみんな